

---

# 前に進むために。

薄桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

前に進むために。

### 【Nコード】

N0470V

### 【作者名】

薄桜

### 【あらすじ】

梅雨の中休み、デートに出かけた聡太と葵は面白そうなものを見つけてしまった。「・・・あれ、美晴さんだよね?」店から出てきた彼女はいつもと違って可愛らしく変身し、背の高い男性に手引きされている。もうこれは追いかけるしかないでしょう?写真の恨みを晴らす絶好のチャンスでしょう!

おなじみ(?)「I I d o n c v i e . . .」シリーズでございます。

## 梅雨の中休み（前書き）

SF作品書いてて、予定より一ヶ月遅れてしまいました。が、やーつと投稿出来ます。

本編10話、舞台裏的外伝2話の全12話となっております。

2話以降は、いつものように毎朝10時の更新です。  
ではござ。

## 梅雨の中休み

梅雨の只中なのだけれど、今日は幸いにも晴れている。

だから・・・という訳ではないのだけれど、今日は聡太そんたとデートに出かける予定で、いつもの朝のように家まで迎えに来てくれた彼と一緒に、駅まで歩いた。

久しぶりの青い空は見事に晴れて、まだ朝だというのに肌に当たる光はチリチリと痛む。日傘でもあれば良いのかなと思わないでもないけれど、荷物になるなと思って止めてしまった。

駅に着き、何となくオープンカフェで一息つこうと、グリーンのパラソルの下でアイスのカフェラテを飲みながらしていた・・・のだけれど、不意に彼は私の後方を険しい顔して凝視し始めたので、私は不思議に思って声をかけた。

「どしたの？」

「ああ、葵姉あおいねえ、あれ・・・美晴みはるさんだよな？」

「美晴？」

彼が指差す方を振り返って見ると、きれいな女の人と背の高い男の人に引きずられている女の子の姿があった。

グレーの生地に、一見目を引くけれどよく分からないゴチャゴチャした黒いプリントのTシャツに、ジーンズとエンジ色のキャンバス地のスニーカー・・・うん、確かにあれは美晴だ。さすがに長年の友は見間違えようが無い。

あの嫌々ながらの様子は、抵抗を止めた後の態度みたいで・・・一体何なんだろう？

そして、引きずられた彼女は、そのまま一件の店に連れ込まれてしまった。

「あそこって、色んなブランド品扱ってるセレクトショップよね？」

「そうらしいね、」

もちろん、一介の学生がそんな敷居の高い場所に入った事も無く、せいぜいショーウィンドウに飾られている品を何となく目にするのが精一杯だ。

店から聡太に視線を戻すと、彼も私を見ていた。

・・・どうやら私達は、同じ事を考えてるらしい。

「今日はカメラ持ってきてるよ」

彼はカバンからデジカメを取り出すと、これ以上無いほど晴れやかに笑った。

・・・そうよね、今まで私達に色々やってくれたんだもの。

あの先月渡された、私達がキスしてる写真だって・・・貰って嬉しくないってわけじゃなかったけど・・・やっぱり私、ああいうのは反則だと思っのよね。

だから、少しくらい仕返ししたって文句無いわよね？

\* - \* - - \* - - \* - - \* - - \* - - \*

朝、玄関のチャイムが鳴った。

すぐに廊下を歩いてる音がして、母さんが出たから良いやと思っっていたのだが・・・まったく良くなんか無かった。

扉が開く音と同時に、よく知ってる声が聞こえる。

「おはようございます、弘美さん。」

はあ！？ 何で芳彰よしあきの声がするんだ？ しかも、弘美さんってどういう事だ？

「芳彰くんおはよ。あら、あれ今日だったかしら？」

ねえ、母さん・・・何で？ どうして芳彰と知り合いなんだ？

気になった私は、気付かれないように、そーっとドアの傍まで移動して耳をじつとそばだてた。

「はい。美晴を借りに来ました。」

借りるって何だよ、借りるって!？

「ですって。美晴、どうせ聞いてるんでしょ？　いつまでも隠れて無いで出てらっしゃい。」

そりゃ、玄関の隣の部屋なんだからもちろん聞こえてるさ。おまけに、傍まで来て聞き耳立ててたしさ・・・

行動が見透かされている事が面白くなくて、この二人がグルなのが理解できなくて、しぶしぶながらに扉を開けると、即座に母に腕を引つ張られた。

「ほらほら早く来る、はい行ってらっしゃーい。」

引きずり出されて、玄関口まで背中を押され・・・

「えっ、何？　ちよつと待って、私何も準備してないよ!？」

本当によく分からないんだけど、どっかに連れ出そうとするならするで、準備くらいはさせて欲しい。かろうじてパジャマではないが、着古したTシャツに、いつものジーンズっていうのは、出かけるような格好では無い。

「いいわよ、どうせ美晴の服は可愛げが無いんだから。」

「なっ、なにそれ、私は私の着たい服選んでるよ!？」

「それが、可愛げがないのよ。」

母に自分のファッションセンスをバツサリ切られ、受けたショックが癒える間もなく・・・いや、

「後はこっちでやるから心配すんな。」

と、何でもない事のように笑う芳彰の態度に、傷に塩を塗りたくらんでもしたような心地になった。

「何が心配？　こっちって何？　私、何が何だかさっぱり分かんないんだけど!？」

「暴れてないで、さっさと出かけたらどう?？」

だから、どうして母さんは状況の整理をさせてくれないの？

説明したくないのは何となく分かるけどさ・・・逆の立場なら、私も絶対同じ事をする。が、それとこれとは話が別だ。

「・・・じゃあ、持ち物くらい準備させてよ?？」

「仕方ないわねえ、待たせちゃ悪いから早くしなさいよ?？」

「別に財布いらなから、携帯くらいでいいぞ。」

「そうよね、デートなんだから女の子は財布要らないわよ。」  
もうこの時点で疲労困憊である。

・・・なのに、これから一日連れ回されるのかと思うと、溜息しか出て来ない。

おかしい。今日はいつものように、フラッと芳彰のそこに行ったり、写真の整理をしたりで一日を終えるはずだったのに・・・。

何で向こうから誘いに来るんだ？ そもそも何で二人が知り合いで、一体何を企んでるんだ？

私は母さんに付き合ってる人がいる事・・・はバレたが、芳彰の名を出した事も無いし、会わせた事も無い。

・・・という事は、怪しいのは妹の和歌奈の線しかないが、母さんとするんでいるとなると、下手に動くの禁物だ。逆にもっと追い込まれるような状況になりかねない・・・。

「美晴、早くなさい。芳彰くん待たせちゃ駄目ですよ。」  
今、どうにか状況の整理をしようとしてるっていうのに、母さんが急ぎ立ててくれる。

・・・今まで芳彰と楽しそうに話してたくせにつ！ あーもつつ、なるようになれ！！

携帯を乱暴にポケットに押し込み、覚悟を決めて部屋を出た。

何故か笑顔の母を苦々しく思いながらスニーカーを履くと、同様に笑顔の芳彰に腕を掴まれた。

・・・そんな事しなくても、逃げやしないよ。

「ありがとうございます。じゃあ、お借りしますね。」

そんな馬鹿丁寧な挨拶をする芳彰も芳彰だが、

「じゃあ、二人とも明日まで楽しんでらっしゃい。」

はあ？ 明日ってどういう事だ！？ ねえ夜はどうなるの???

「ちよつと母さん!？」

「はい、いつてきます。」

「ねえ芳彰!？」

母さんそれで良いの？ 二人とも何て話してんの！？  
「いってらっしゃい。」

梅雨の中休み（後書き）

えー、バタバタ？

諦めと驚き(前書き)

2 話目です。

ではいよいよ。

## 諦めと驚き

そして、私は笑顔の母に見送られ、芳彰に引きずられるようにして外に連れ出された。

それから、下に停めてあつた青いBMWの後部座席に押し込まれ・  
・これは駄目だ。と、完全に自らの敗北を認めざるを得なくなった。  
隣には当然のように芳彰が乗り込み、運転席にはもちろんあの人。  
芳彰の姉の茜さんがいる。私はあの人には、どうやっても勝てない・  
・勝てる気もしない。

「・・・それで？ 私はどこに連れて行かれるんでしょうか？」  
わざと嫌味つたらしく尋ねるが、悔しいかな帰ってくるのは甘い囁  
き。

「もちろんデートに決まってるだろ？」

頼むから、そんなに耳元で囁くな・・・。

「でもその前に、美晴ちゃんはきれいになるうか？」

バックミラーに映る茜さんの笑顔と目が合い、私は更に諦めの境地  
に至った。

いくらBMWでも、ツードアのおまけ程度の後部座席の乗り心地は  
大した事が無い。

幅が狭いせいで足の置き場が心許なくて、揺れて振り回されそうに  
なる度に、芳彰に支えられるのが何となく悔しい。

車は駅の方へと向かい・・・路上パーキングに駐車して、それから  
私は二人に腕を取られ、駅前にある一軒のお店へと連れ込まれた。  
ブランド中心のセレクトショップで、恐れ多くて入った事など一度  
も無い。

・・・確かに『後はこっちでやる』って言ってたけど。これはどう  
いう事だ？

「じゃあこれと、これ、あと靴はこれで、バックはこれ可愛いわね。

「うん、いいんじゃないか？」

この姉弟は私が呆然としている間に、値段など一向に気にも掛けず、服やカバンをあっさりと選んでいく。

「さあ着替えましょうか、お姫様？」

数分後にはお店の人に誘われて、私は店の奥へと連れて行かれた。

・・・あのさ、これ、お店の人までグルなのか？

\* - \* - - \* - - \* - - \* - - \*

開店直後の客の少ない状態から、粘り続けている間に客は幾らか増えた。

美晴さんがあの店に連れ込まれてから、もう1時間近く過ぎた事になる。

「確かあの人、美晴のデジカメで見た人よ。」

という葵姉の意気込む話を聞いて、とても期待感は大いのだが・

・これだけ時間が過ぎると、もうさすがに待つのに飽きた。

だから、どうしようかって話をしていた時、美晴さんを連れて行った背の高い男性が店から出てきてホツとした。ちなみに今彼は、ワンピース姿の女性を伴っている。

そして、やや遅れて最初に入っていた女性も続く。

・・・という事はつまり、ワンピースの女性が美晴さんだということになる訳か。

キレイなラインの薄いラベンダーのワンピースに白いカーディガンを羽織り、ワンピースと同系色のヒールの高い靴。そして、大きめの花の飾りのついた白いバックを手にして、髪は上げて纏められ、きつと化粧もしている。

もし、知らずにすれ違ったら、あれが美晴さんだとは絶対に気付かないだろう。

そもそも、制服以外のスカート姿を見るのは初めての気がする。あ

の人は小学生頃から半ズボン履いてもスカートは履かなかった。

「まさか、全身コーディネートとは思わなかった。」

「何？ 一体どこのセレブなのよ？」

葵姉の声音は動揺しきりで、僕同様に驚いているのは間違いない。しかし、あんなに明らかに戸惑っている美晴さんを僕は始めて見た。入る前の嫌々な感じでは無く、あれは恥らっている。

けれど隣の男性は何食わぬ顔で彼女の手を引き、そんな彼女の反応を楽しむほどに余裕なのだろう。

僕が振り回されてばかりいるあの人も、人に振り回される事があるんだなと意地悪くも感動し、今彼女を振り回している彼に、ほんの少し尊敬の念を抱いた。

しばらくはその場で三人・・・正しくは、ただ突っ立ってる美晴さんを除いた二人が話をしていたが、女性だけがその場を離れ、路上パーキングに止められた青いBMWの2ドアのクーペに乗り込んだ。・・・おいおい、あのBMW確かものすごくいい値段だったはずだ。美晴さんの彼氏は一体何者だ？ 何であんな車を足に使ってるんだ？？？

葵姉の使った『セレブ』という言葉が、僕の中で一気に真実味を帯びてきて、思わず顔が引きつるのを意識した。

・・・やっぱり美晴さんは謎の人物だ。

そして残るのは当然、美晴さんとあの男性。

「ひよつとしなくても、あれデートよね？」

同じ事を考えた葵姉は、期待に満ちた目を僕に向け更に声を弾ませる。

「面白そうな展開が期待できそうね。」

「・・・そもそも想像が付かないよね。」

まさかあの人のデート現場に遭遇するとは思ってもしなかった。確かにこれはいい仕返しができそうだなと、心が騒ぐのを感じる。

人が悪いと思わなくもないが、今までの仕打ちを思えば何でもない。別人のように変身した美晴さんは、彼氏に手を引かれて駅へと向か

って歩き始め、

「さあ、私達も行きましょう。」

少々興奮気味の葵姉も行動を開始した。

「そうだね。」

僕はその姿に苦笑しながら返事をして、駅に向かって歩き出した。

## 諦めと驚き（後書き）

青いBMWのスポーツカーが良いそうです。

随分前になりますが、仕事で縁のあった某配送弁当屋の専務が仰ってました。

先代の娘さんで、社長は婿養子です。

子供を塾に送る都合で、4ドアセダンのBMWに替えただけ、やっぱり不満だ。

・・・と、その車の中で聞きました。

その辺りを参考にしたチヨイスです。

後部座席の乗り心地の参考は、BMWではなくポルシェ。

助手席は知りませんが、2ドアの後部座席はそんなものだと思う。

乗せてもらった一番珍しい車は、ロータス・スーパー7。

車好きの社長の持ち物でした。・・・働いてた頃ですけどね。

車高の低いオープンカーで、駅から出てきた学校帰りの大量の中高生に遠慮の無い目でジロジロと見下ろされるといって、貴重な体験をしました。

**電車に乗って（前書き）**

3 話目です。

ではいひな。

## 電車に乗って

「ねえ、何処行くの？」

「内緒。」

むー、一人だけ楽しそうで悔しい。

何度聞いても尋ねても、その質問にはまったく答えてくれない。私はこのまま大人しく、手を引かれるまま付いて行くしかないのか？

休日の午前中。乗り込んだ電車は見事に空いていた。

友達の志帆ちゃんみたいに電車通学じゃないから、通勤ラッシュってのはテレビの向こうの世界のものって感覚しかないけど・・・これがガラガラって状態だってくらいは分かる。

子連れの家族と、これから仲良く遊びにいくような女の子3人と、微妙な距離を保った・・・カップル？

それに比べて私達とは言えば、暑いのにぴったり隣に座って、しっかり手まで握られて、私はそんなに逃げ出しそうか？ そんなにも信用が無いか？

右側の芳彰を見上げると、彼は平然として私に優しい目を向けるから・・・変に照れる。

そもそも、慣れない自分の格好に違和感を感じまくりで、居心地が悪いつていうのに、おまけに芳彰は何かカッコ良いし・・・黒いボタンの白シャツに、黒のチノパン、袖を捲った麻のジャケットを羽織り、腕には高そうな腕時計が光っている。

こんな姿は初めて見た。

普段もラフながら、何か感じ良く着こなしてるけど・・・うん。

電車が揺れる度に腕が触れ、その度に無性にドキドキが増して・・・やっぱり変だ私。

「何照れてんだ？」

妙に嬉しそうな芳彰の言葉にムツときて、繋がれたままの手を離そうとすると、逆に力を込められた。

そして、少し後悔の色がにじむ表情に思わず笑い、私は少し肩の力が抜けた。

「・・・何だ、今日はやたらとすまして、振り回して、調子を狂わされてばつかったけど、普段の芳彰と全然変わらないじゃないか。

「そんなに笑うな・・・何か傷つく。」

「大丈夫、私が安心しただけだから。」

「・・・何だそれ？」

「んー、惚れ直したってとこかな？」

うん、やっぱり芳彰かわいい。

「それ、何かを逸らかしてるだろう？」

ひどいなー、本心なのに。

疑惑の目を向けて来るから、私も真っ直ぐ見返してみると、芳彰の方が目を逸らした。

「・・・まあいいや、ほら次降りるぞ。」

何か勝ってしまったような気がする。・・・って、

「次？」

前方上部の掲示欄に貼られた路線図に目をやると、駅名の横に飛び跳ねるイルカとシャチのイラストが描かれていた。

「・・・水族館？」

「気付くの早いな、降りる場所だけでバレたか。」

あの絵を見たら一目瞭然だと思っただけど、その声はちょっと悔しそうな色を含んでいる。ひよっとして芳彰は、あの路線図に気付いて無いんだろうか？

\* - \* - - \* - - \* - - \* - - \* - - \*

僕達も同じ電車の隣の車両に乗り込み、ギリギリ二人が確認出来る場所でこっそり様子を窺った。

「うん、やっぱりあの人よ。デジカメの人で間違いないわ。」

「へえ・・・、年上だよな。」

何となくだけど、20歳前後くらいかなって感じがする。

「そうね。まったく、人の事は散々突付き回しておいて、自分の言はまったく報告無しなんだから。美晴らしいけど、許さない。彼氏の事だって、先生が教えてくれなかったら、きっと今も知らなかったかもしれないし・・・後で絶対吐かせてやるんだから！」

うわっ、葵姉の変なスイッチが入った。これは今日とことん追いかけてそうだな。

っていうか、先生から聞いたつても気になる話なんだけどな。

「んー、でもあの人、どつかで見た気がするんだけどな・・・。」

「何？ 写真じゃなくて？」

「うん、それより前。・・・何となく、あのシルエットに見覚えがあるのよね・・・。」

そう言っただけ目を閉じ、一本立てた人差し指を眉間に当てて、どうやら記憶を探っているらしい。

一方美晴さんに目をやると、照れて終始落ち着かない様子で・・・

僕は今とても珍しい物を見ているんだと思う。

それでもずっと手は繋いだままで、まったく仲が良いものだと思われ  
る反面、実は少し羨ましかった。

こちらの彼女はと言えば、未だ思い出そうと頑張っていて、頭の中の言葉が微かに口から漏れているが、まだしばらくは帰って来そうにはない。

・・・もしまつとこのままだと、僕は葵姉と手を繋げそうな気がしない。

3つ目の駅に着く頃に、不意に美晴さんの笑う声があった。

僕は急いで視線を戻したものの、多分何かを見逃した。一体何があったものか、彼女は既にいつも通りの雰囲気だった・・・やっぱり僕達は珍しいものを見てたんだなと、宝くじにでも当たったような気分になった。

電車を降りて改札を抜けると、駅から繋がる連絡通路を抜けて水族館へと向かう。

芳彰は入場券を買わずに、ジャケットの内ポケットからチケットを取り出した。

半券とパンフレットを返すスタッフに「お楽しみ下さい。」と笑顔で見送られ、すぐの角を曲がると私は思わず目を見張った。

壁一面にはめ込まれた、たくさんの魚が泳いでいる巨大な水槽に圧倒された。

案内板には『近海の魚たち』とあり、熱帯魚のような派手な色合いではないが、上から差し込む光の筋が、まるで美しいドレープをのようだ。

群れで舞う小さな魚達は一糸乱れぬ動きを見せ。悠々と泳ぎ回る大きな魚は、のんびりと見せ掛けの自由を楽しんでいる。

これは、なかなか圧巻だ。

「初めて来たのか？」

見とれる私に、満足そうな面持ちの芳彰が声をかけて覗き込んできた。

「うん、リニューアルしてからは初めて。以前のは遠足とか家族で来た事あるけど・・・全然違うね。」

「そうだな、二年位前だっけ？俺は・・・昔のは遠足で来たな。」  
何となく違和感のある言葉と間だった。

あの台詞、そして驚く私に満足して・・・って事は、以前に絶対に来ているはずだ。

何もわざわざ隠さなくたっていいのに。そんな事されると追求したくなる。

「じゃあ、新しくなってからは？」

「・・・さ次見ようか。」

芳彰はあっさり逃げた。

その態度があまりにも分かりやすく、おかしくて、

「変に誤魔化すと、当時の彼女に悪いぞ。」

そう言つて笑つてやると、ジト目で見られ、

「・・・やっぱり、変なやつだな。」

と芳彰は溜息のような、苦笑を漏らした。

\* - \* - - \* - - \* - - \* - - \*

入口でそれぞれにチケットを買つて中に入った。

予想外の出費になるが・・・まあ予想外のデートだから仕方が無い。

「きれい。」

だけど、嬉しそうに水槽に近付く葵姉を見ると、こういうのもいなくなつて思う。

「ずいぶん変わったね。」

小さい頃に来た時の水色の壁に嵌った水槽とはまるで違い、今のこは光と色が押し寄せてくるようで迫力がある。

円柱の水槽をぐるぐると回るイワシの群れ、エイが飛ぶ180度水槽のトンネル、体の一部が明滅するクラゲ、水槽のどこにいるのかよく探さないと分からない小さな珍しい魚、ふてぶてしい顔した密林のナマズ、すごい速さで泳ぎ回るペンギン、人懐っこそうに寄つてくるイルカ。

美晴さんの事はどうでもよくて、実は忘れてしまったんじゃないかと思えるほど、葵姉は楽しんでいた。

でも、二人を追いかけて来たから、こんな彼女が見られた。

もし、二人を追いかけていなかったら、僕達は今頃どこで何をしていたのだろうか？

**電車に乗って（後書き）**

うーん、水族館行きたいなあ・・・。

## ランチタイム(前書き)

4 話目です。

ではおしまい。

## ランチタイム

水族館を一通り見て回ると、そろそろお腹が空いてきた。

芳彰の腕を捕まえて時計を見ると、そろそろお昼になりそうな時間だった。

「普通に時間聞けばいいだろ？」

「だって、ここに時計があるんだもん。」

すっかり口答えをして見上げると、口の割りに満更でもなさそうな顔してて、どっちなんだって思う。

「・・・そうですか。昼にするか？」

「うん、お腹空いた。」

って答えたら、すぐ傍のお店に連れて行かれた。店構えとしてはイタリアンレストラン・・・だと思っ、だって緑・白・赤のトリコロレの国旗がはためいてるし。

だから、多分イタリア語で書かれてる看板は私には読めない。無理やり英語読みしてみるのも違うだろうし、ここは何て名前なんだろう？

案内された席は海が見える場所で、手書きのランチのメニューから、それぞれトマトとクリームのパスタを頼んだ。私がトマトソースで、芳彰がクリームだ。

最初に来たサラダは芳彰が取り分けてくれた。気がせいではないはずだ。

パプリカは全部私の皿にある。

「パプリカも嫌いなのか？」

「だって、甘いピーマンって変じゃないか？」

「じゃあ普通のピーマンは？」

「・・・存在しなくていい。」

そう言っつて目を逸らす。

・・・どっちにしる食べないんだ。子供の言い訳みたいでまったくもって面白い。

スープとパンが置かれ、私は早速パンに手を伸ばした。

でもトーストされたそれは熱くて、驚いて引つ込めたら笑われた。

スープも熱くて、猫舌には残念ながらまだ手が出せない。

それでいじけそうな気分していると、お皿に乗ったパンが前に置かれた。

「ありがとう。」

と一言添えて、今度は用心して手に取った。

千切るとトマトが練りこまれているのか、少し赤くてハーブの良い匂いがした。

メインのパスタが来た。

私のエビと三種のチーズのトマトソースも美味しそうだけど、

キノコとベーコンのクリームソースのフェットチーネも美味しそうだったのだ。

一口分貰って食べたなら、私の皿から3倍くらい持っていかれた。

しかもそれは一口で消えてしまった。

「あっ！」

と、思わず抗議の声を上げたら、

「もう食べた。」

とだけ返ってきた。

食後のデザートにはブルーベリーソースのかかったチーズケーキを選んでいた。

芳彰はリンゴとカスタードのタルトだったんだけど、甘過ぎたのか、パスタのお詫びなのか、そこはよく分からないけど半分くれた。

コーヒーをブラックで飲む彼に、

「じゃあ、遠慮なくいただきます。」  
と、内心笑いながら感謝し、フォークを刺した。

とても楽しかったし、美味しかった。  
でも、本当の所の一番の感想は、  
ランチセットでもこんなにするんだ・・・という事だった。

\* - \* - - \* - - \* - - \* - - \*

「お昼どうする?」

美晴さん達はこの店に入って行っただが、僕はチョコレートで書かれたメニューを見て、より正確にはメニューの値段を見て躊躇した。  
払えない事はないが、そうすると後々苦しい。

葵姉も微妙な表情をしているから、きつと似たような事を考えているのだろう。

他に何か無いものかと見回すと、洒落た外装の手作りのパン屋が見えた。

「あそこで何か買って、そのベンチに座って食べようか?」

彼女は振り返って店を見て、どことなくホツとしたような顔をした。

「美晴の彼氏、美晴に関連する人物・・・あー、そうだ。冬頃に見たんだ。」

木陰になったベンチで、クリームチーズの入ったパンに齧り付きながらも、未だ美晴さんの彼氏について考えていた葵姉は、やっと何かを思い出したらしい。

「冬?」

ようやく見る事ができたすっきりした表情で、彼女は言葉を続ける。  
「うん、寒い中いつも立ってる妙な人がいてね、美晴が面白いもの見つけたって喜んでただけど・・・まさかその人と付き合ってるとは。」

「・・・どうしたらそうなるの？」

『妙な人』は付き合う対象には成り得ないだろう？ 僕にはとても腑に落ちない。

さすが美晴さんだけある。考える事がさっぱり分らない。

「さあ、美晴の事だから分らないけど。でもあの時と今は別人みたいな印象よ。だからなかなか繋がらなかったのよね。」

葵姉は少し拗ねた様子で言葉を切ると、ペットボトルのミルクティを流し込んだ。

「じゃあどんな感じだったの？」

何がどう妙な人なのか気にはなる。確かに寒空の下で黙って立つっっているだけでも十分に怪しいが、それには事情もあるんだろう。

しかし、それくらいではあの美晴さんが『面白い』なんて言う訳が無い。他に何かきつと理由があるはずだ。

「冬に見かけた時は、いつも仏頂面だったかな。寒いから仕方ないのかもしれないけど、美晴と違って、ずっと見ていた訳じゃないし・

・・・でも全然、あんな楽しそうな雰囲気じゃ無かったわね。」

・・・残念、謎は謎のままか。

**雨降って地固まるっ？（前書き）**

5 語田です。

ではいひな。

## 雨降って地固まる？

昼食後、雑貨屋で実用性の乏しいかわいらしい傘と、アジアンな雰囲気のカエルの置物を見て、何気なくアクセサリーを見てたら、「どうせならこっちにしよう。」

そう言った芳彰に、違う店に連れて行かれた。

「ねえ芳彰・・・本気？」

「何が？」

彼は気にした様子もないが、私は気にする。

「そんなに高いものは買って貰えない・・・って言うか、買うな！」

「美晴？」

目の前にあるのは、本物のジュエリーショップで、という事は値段もそれなりだろう。

現在医大休学中の芳彰は、ついでに家出中で、そのくせその生活費は全て親に頼っているというお坊ちゃんだ。

絵を描きたいという本人と、医者になつて家業を手伝えという、親子の間の葛藤は解らなくもない。結局ほんの少し親が折れて、1年間という時間の猶予をもらい休学し・・・今に至っている。

その時間をちゃんと活かして、絵ばかり描いてるのも知ってる。

結局芳彰も折れて、復学のために勉強し直してるのも知っている。

今日が息抜きだつて言うのならそれでもいい。日頃の努力を考えれば、私は文句を言う気は無い。

しかし・・・それとこれとは話が別だ。

私にプレゼントするのは違うだろう？

「ふざけるな！ 今日連れ回されただけでも、いくら使ってるんだ！？」

「美晴、落ち着け。いいから落ち着け。まずは話を聞け。」

息巻いて続けようとしたが、芳彰に両肩を掴まれ先手を打たれた。

彼を見上げると、『やっぱりな』って顔に書いてあるような気がす

る。

「お前の言いたい事は何となく分かるんだが・・・それは違う。誤解だ。」

「何が!？」

彼は何度か深呼吸をして、覚悟を決めたかのように口を開く。

「あんな、これは俺の金。れっきとした俺の稼いだ金だ。」

「バイトでもしてたのか？」

階段下りればすぐ彼の部屋で、以前色々と探つて、彼の事を随分知つた気にはなっているが、実際には知らない事だらけだ。

私知ってるのは、『史稀<sup>しき</sup>』と名乗つてた頃の捻くれた不振人物と、あの部屋にいる芳彰ばかりで、他は知らない。

彼の内面は見れば分かる。しかし、彼に関する事柄は事は彼が話した分しか知らない。・・・いや、一部茜さんから聞いたな。

勿論、私があ部屋にいない間の事は知らないし。彼も特に進んで話そうって気は無さそうだし、私にも言いたく無い事はある。だから詮索しようなんて気なんか無い。

そうか・・・そうだな。私は彼が普段何をしてるのかって、本当は知らないんだな。絵が出来上がるスパンが短いから絵ばかり描いてるものだと思つていたが、それは実は私の思い込みで、バイトしてたつて言われても、そうだったのかと思うくらい・・・なんだよな。

「いや、絵が売れた。」

「は？」

えーと、ごめん、それはまったく予想していなかった。

「姉貴が、いくらか勝手に持つてつたつて言つたら？ あれ知り合いの画廊に置いて貰つてたらしくてさ・・・それが売れたんだつてさ。」

なるほど・・・すべて私の杞憂ですか。

確かにキャンバスがごっそり消えてて、理由を聞いた事がある。

芳彰は気恥ずかしそうな表情を浮かべているが、そこに嬉しそうな色は見えない。これは本人も戸惑っているという事だろうか？

手の届かない夢や理想を追いかけるのは楽しい、しかし、手が届きそうになると途端に怖くなる。何故なら、そこから先に進むには覚悟や責任が必要になるからだ。ひょっとしたら芳彰は今、そういう心境なのかもしれない。

「あのさ、そういう事は最初に言っておこうよ。．．．そしたらもつと楽しめたのにさ。」

何か悔しいから、溜息に混ぜて本音を吐いた。

「やっぱり美晴はびっくりさせるとの難しいな．．．。」  
芳彰も溜息を吐いて嘯く。

「そうでもない。十分びっくりしてるし、かなり嬉しい．．．。」  
私は自分でもびっくりする事態が起きて、私は芳彰に抱きついた。

「美晴？」

まさか泣きそうになるなんて思わなかった。泣き顔なんか、もう絶対に見られたくない。

「だって．．．、どれだけ真剣に描いてたか知ってるから．．．。」  
私、いっぱい邪魔したけどさ。」

「そうだな。」

優しく笑う声がして、背中に手が回された。

「おめでとう。」

「ありがとう。．．．ああ、そうだ。先に言っておくとその服一式は姉貴からだ。でも、他は俺からの感謝の気持ちと、初デートの記念？」

記念って何だよ！？

急に女の子みたいな事を言い出したから、吹きそうになった。でも、おかげで少し自分に戻れた。素の状態ですつまでもくっついてるのは、さすがに恥ずかしい。

体を離してから、私は疑問を口にした。

「そっか、でも何で茜さんが？」

「姉貴も美晴に感謝してるんだってさ、」

．．．やっぱ過保護だ。

「それと・・・、」

芳彰は急に言いにくそうにして上を向き、一度深呼吸をしてはつきりと言った。

「俺、家に戻る事にした。」

これも予想してなかった。

1年間という期限はあったものの、実家のすぐ傍で自立でもなく一人で暮らす状態は、正直言って不自然で、完全に甘えだと思っていたし・・・私もそれに甘えていた。すぐに会える場所にいる事が心地良かったのは事実だ。

でもそっか、ちゃんと決めたんだ。

「ん、頑張れ。」

だから、一言だけエールを送った。

\* - \* - - \* - - \* - - \* - - \* - - \*

「ねえ、あれ。あの二人喧嘩してる？」

葵姉が言うように、雑貨屋から出てきた二人は違う店の前で言い合い・・・ではないな。

美晴さんが一方的に声を荒げていて、彼氏の方は、すぐさまなだめに回った。

「珍しいわね、美晴があんなに感情的に人に当たるなんて。」

「うん、そっだよね。」

迷惑なちよっかいを出してはきても、人に喧嘩を吹っかけて来る事は無い。

以前に一度、僕は美晴さんを怒らせた事があるが、それとも違う。あの時は・・・僕に厳しく、自分には更に厳しくといった感じで、最終的にはどちらも苦手なはずのカラオケで、耐久レースの様相を呈した。

ただ、あの人は自分の都合だけで人を批難する事は無い。だから、あれだけ怒っているのには、それなりの理由があるのだろう・・・

とは思うが、理由はさっぱり計り知れない。

葵姉と顔を見合わせて、そのまま成り行きを見守っていると、事態は急展開を迎えた。

何で急に抱きつく!?

往来の真ん中で・・・あの人そんなに情熱的な人だったのか？

「美晴・・・やるわね。」

隣から聞こえた声に驚いて見ると、葵姉は嬉しそうに手を握り締めていた。その言葉の真意を測りかねて・・・そう、それが観客としての言葉なのか、自分もそうありたいという事なのか、そこはあえて聞かないでおく事にする。

その後、美晴さん達は店へと入って行った。

再び手を繋いで、ジュエリーショップへと・・・。

雨降って地固まる？（後書き）

庶民感覚で。

無駄な足掻きと無駄な焦燥（前書き）

6 話目です。

ではさしあげ。

## 無駄な足掻きと無駄な焦燥

改めてジュエリーショップに向かうが・・・やっぱり場違いな感じで、気後れがする。

「さ、どれでも好きなのをどうぞ、って訳にはいかないけど、見てみよう。」

しかし芳彰は、自然な様子で私を誘う。

・・・そんなに慣れてるのか？

今朝もそうだったが、姉弟揃って値段を見なかった。これも育った環境の違いというヤツなのかもしれないが、私は私で違う育ち方をしている。

再度の催促を受けて、仕方なくショーケースを覗き込むが、やはり値札を見るのは怖い。

小さな指輪が何万もする事に異論は無いが、それは私の世界の話ではない。

・・・やっぱり貰うのには抵抗がある。

他を見る振りをして、どうやって断ったものか必死に考えていると、いい物を見つけた。なるほど・・・そういう手もあるか。

「あれ、ああいうのがいい。」

私はショーケース上の小さなPOPを指差した。

「ペアリング？」

芳彰は、私が差したポップの文字を音にした。

うん、ただ私だけが買って貰うだけってのはものすごく抵抗があるけど、これなら。

「首輪とか、虫除けって事じゃないんだけどさ、何か同じ物持つてるのは嬉しいっていうか・・・普段は別に着けてくれなくてもいいんだけどさ。私も学校で着けるわけにいかないと思うし。後・・・やっぱ少し寂しいし。」

とはいえ、心の中にある事を、言葉にするのはすごく照れくさかつ

た。何か自分でもグダグダだなんて、ものすごく思う。

だから、さつきは言わずに飲み込んだ言葉を、つい言ってしまった。そしたら芳彰は満足そうに笑って、突拍子も無い事を言い出した。

「じゃ左手の薬指でいくか？」

「はっ？ なっ、えっ、ちよっと？」

言うに事欠いて、それか？

「ま、待て、そこまでは言っていない、私そんなに縛る気はないぞ。」

私は芳彰が好きだけど、まだそんな先の事は分からない。

芳彰は違う人好きになるかもしれないし、喧嘩して別れてしまうかもしれないし……だから、そんな特別な意味のある指に軽々しくはできないってば。

「いいから、予約させといて。」

だけど自信満々な様子でそんな事を言うから、思わず顔が熱くなる。

……本当に、そんな覚悟で言ってるのか？

「……後でキャンセルしたくなっても知らないぞ？」

「俺はキャンセルしないし、美晴にもさせないように努力します。」

うわっ、責任重大な事をそんな簡単に……。

私は益々熱くなって、嬉しいと思った事が恥ずかしくって、思わず目を逸らした。

「……私は芳彰しか好きじゃないもん。」

初めて本気で人を好きになって、尊敬出来て、傍に居るのが嬉しくて楽しくて、芳彰しか知らなくて……今の私には他の人の事なんて考えられない。先の自分もきつとそうだと思う。

ピンクゴールドとシルバーの同じデザインの色違いで、それぞれ小さなホワイトダイヤ、ブラックダイヤの嵌った指輪を選んだ。

私を選んだから、そうびつくりするような金額じゃない。

指輪の受け取りは、サイズ直しのために一週間ほど先になった。

ジユエリーショップから出て来た美晴さん達は、やっぱり手を繋いだまま海沿いの道を歩いて行く。

「何か本当、今日の美晴は別人みたい。」

葵姉がそう言うのも無理は無い。僕の目にも別人に見える。

自分に厳しく、潔く、どちらかと言えば男らしい性格で、そして悪ふざけが過ぎて、非常に腹の立つ人なのに、今は何だか可愛く見えるから不思議だ。

それは普段と違う服や髪型のせいって訳ではなくて、隣の男性によるものなのだろう。

今日半日追いかけてずっと感じていた事だが、あの美晴さんを落とすただけでも凄いのに、きちんとエスコートして、しかも往來で美晴さんを抱きつかせた。

・・・一体どんなやり取りがあつたのか、距離があつてさっぱり分からないが、あれには本当に驚いた。

ずっと見ていて、僕は何となく差を感じて自分が情けないような気がしていた。心に澱が溜まっていくような心地がして。この差が年齢によるものだけであればいいと心底思っていた。

「どしたの、険しい顔しちゃって？」

葵姉に声をかけられて我に返ると、覗き込まれていた。

「ん？・・・んー、僕はまだまだ未熟者だなと。」

変な所で心配かけたくなって、冗談めかしてこぼすと、葵姉は不思議そうに言った。

「そう？ 私は今の聡太がいいけど？」

「だけど・・・」

一応僕にもプライドって物がある。見栄を張ろうつてとこまでは思わないけど、差を見せ付けられるのは面白くない。

「私がいいの。あっちはあっち、こっちはこっち。背伸びしたって人真似したっていい事無いよ？ 聡太には私を見て欲しいんだか

ら。」

ねっ、と手を繋がれて引つ張られた。

お見通しですか……。

「さーで、私、本屋さんに行きたいんだけど付き合ってくれる？」

そうだ、かわいい封筒も買わなきゃね。」

葵姉は有無を言わず、そのまま僕を引つ張って向きを変えた。

「追跡はもういいの？」

以外にあっさりした引き際に驚いてそう質問したのは、僕がその先を見てなかったからだ。葵姉は一瞬ギクリとして僕を見て、何の事が解らない僕は首を傾げると、ホツとしたように笑い出した。

「無理。あれにはもう付いて行けない。」

あれって？

葵姉に引つ張られながらも振り返ると、二人の向かう先には、海を臨む形にそびえる高層のホテルがあり……一瞬頭がパンクしそうになった。

「……そうだね。」

人それぞれ歩く速度が違うように、考え方も違う。付き合い方も違う。

まあ、それはそれでいいのかなって……今、実感した。

今日のイライラも焦りも、取り越し苦労だったなどと、葵姉に見透かされて反省したし。多少の羨ましさは否定しないが、あっちはあっち、こっちはこっちってのは間違いじゃない。

## 無駄な足掻きと無駄な焦燥（後書き）

美晴の内側、聡太くんの本音。

ここまで対比で来たけど、聡太くんは残念ながらここで退場です。

彼の考えている事(前書き)

7話目です。

ではごじげん。

## 彼の考えている事

・・・本当に来ちゃったよ。

海の傍というだけあり、青と白を基調とした内装のキレイな部屋で、バルコニーのある窓辺には青いカバーのクッションが置かれた白いソファと、その前にはテーブルが置かれ、壁には大きなテレビが掛けられている。そして部屋の中央には大きなダブルベッドが1台。

「・・・帰ったら何て言えばいいのかな？」

「さてな、それは俺も一緒だな。」

ベッドに腰掛けて、チェックイン時にフロントで渡された、黒いカバンの中身を<sup>あつ</sup>検めていた芳彰は、嫌そうな顔をして手を止めた。

そうか、芳彰は茜さんを相手にするのか・・・それを考えるとちょっと怖い。

「とりあえず、可能なら笑って誤魔化そう。」

そう苦笑して、再び手を動かし始めた。

うちは、泊りがけの外出を勧めてくるような親だ。逆に聞かれないような気もする。

・・・もちろん希望的観測だけど。

芳彰が見ている黒いカバンには着替えなんかが入っていて、茜さんが先回りして届けておいたものらしく、芳彰曰く『そういう手筈』だったらしい。

・・・本当に、仲が良いなこの姉弟は。

このカバンの中には、私分の着替え一式と化粧品の種類も入ってたんだけど・・・それは全て新品だった。今度は細かな模様のあるネイビーの生地のワンピースだった。芳彰がカバンから出した服をクローゼットに掛けに行った隙に、下着のサイズを確認したら見事にピッタリで溜息ものだ。

戻って来た芳彰をジト目で迎えると、彼は再びベッドに座り、つい

でに私も引っぱられて後ろから抱え込まれた。

「とりあえず、これからどうする?」

この体勢でのこの質問が、本当に答えを求めているとは思えない。

「先に行つとく。私これ崩されたら、自力では元には戻れないから。」

牽制と本音だ。

今朝、全てを人に施された髪と化粧が、自力でどうにかできる訳が無い。

髪は今まで少し後ろで結ぶ程度で、何がどうなってるのかよく分からない。化粧だって私は今日までした事が無かった。

「大丈夫、何とかなる。」

「・・・何を根拠に? こ、こら揉むなって、や、やつ、やあつ!」

「んー、期待してるみたいだし?」

「ち、違う、何が期待だ! なつ、意義ありつ・・・。」

「却下します。」

・・・

「なつ!?! 何? 何でこんなに跡付けた!?!」

正気に戻って驚いた。

胸からお腹にかけてに存在する、尋常じゃない数の赤い跡に口元が引きつる。

「あー、何か途中から楽しくなつて。」

ふ、ふざけた理由を・・・。

「そこの白いシャツに口紅付けるぞ?」

今日芳彰が着ていた黒いボタンの白いシャツを指して言うと、鼻で笑われた。

「どうぞ?」

くうーっ、私が挑発として言うだけで、実際にはできないのを完全に見透かされている。

「あーっ、もうっ!」

「天邪鬼。」

そう言つて、また1つ赤い跡を追加された。

・・・何かすごく悔しい。

更に腹が立つ事に、ワンピースを着ると赤い跡は見事に見えなくなつた。

見えても困るが、これほど計算ずくなのも複雑だ。

何とか見られるくらいに芳彰が髪を直してくれて、口紅を改めて引き直し、エレベーターで上上がった。

ホテルのレストランなんて、ボツタクリだろう? としか思えない金額設定なんだろうけど、とりあえず何も言わなかった。

「こういう時は、素直に奢られてくれ。」  
つて、先に言われたからだ。

予約してあるつて言つてたから、今ゴネてキャンセル料取られるのもあれだし、芳彰にも言われたし・・・つて、自分に言い聞かせて居心地の悪い気分を誤魔化した。

で、肝心のご飯は・・・美味しかった。

フレンチの慣れない物ばかりだったけど、キレイに盛り付けてあるなつて感心した。

そつか、やっぱり見た目も大事だなあつて、感心しながら食べてると、

「また妙な事考えてるだろ?」

つて言われた。失礼な、私は研究熱心なだけだ。

二人してノンアルコールで・・・私はまあ当然だけど、芳彰は・・・  
そう言えば弱いつて、茜さん言つてたな。

「芳彰はお酒飲まないの?」

だからあえて聞いてみた。やられっ放しは悔しい。

「・・・姉貴が何か言ってたか？」

素知らぬ顔で聞いたつもりだったのに・・・もうバレたか？ 聞くなとばかりの目が私を射抜いて、ドキっとした。けど、もう一度惚けてみる。

「何を？ 茜さんが何を言うつて？」

「・・・まあいいや、俺は酒弱い。そんなとこばっか父親に似てさ、母親に似れば、姉貴みたいにザルだったのに。」

「それもどうかと思うけど・・・。」

冗談だとは思うけど、中間つてのは無いんだろうか？

「飲めないよりは、飲めた方が都合が良い事つてのがあるからさ。」

「ふーん、それは何となく解るかも。」

コミュニケーションつてのは大事だと思う。

「父親はなんかそれで苦労したみたいで、少し前に無理矢理ボーリング連れて行かれた事があつてさ、ちらつとそんな事言つたんだ。

その時何か黒い炎が揺らいでるような気がしたな。」

「・・・そんなに恨みがあるの？」

珍しい。芳彰が家族の事を話してる。

「借りが返せるつて、目の笑つてない笑顔張り付かせてたから、結構いい性格してるんだなつて、俺はあの時初めて知つたよ。」

そう言つて、目を窓の外に向けた。

私もつられて外を見ると、暗い色の海にいくつか船のものらしい灯かりが浮き、もう少し向こうには緑色に光る橋が見えた。キレイだと思わなくも無いが、それより何故緑色なのだろうと思う。

「俺、本当に向き合つて来なかつたんだなつて、びっくりした。」

芳彰は言いながら皮肉そうに笑つた。おそらく自分に向けてなんだろう。

「理由つけたり、遠慮したり、まあいいかつて諦めたり、そんな事はつかしてきたのかなつて思うと、情けないよな。」

「うん、そう思う。」

私は躊躇することなく肯定した。自分で気付いているなら、気を使

う必要も無い。

「・・・やつぱり、バツサリだな。」

もちろん。私に同情を求めようなんてのが間違っている。

一度は言いよの無い目を私に向けたが、鼻で笑うと、その後は満更でもない様子だ。

「だから予定より早く帰る事にしたってどこ？ やり直す気になったの？」

「ん・・・、そこまで意気込んでる訳じゃないけど、今のまま続けると戻れなくなりそうだしな。やる気になった段階で動いた方が良いかな・・・ってな。」

「いいと思うよ。今度一人暮らしする時は、是非自力でやって下さい。」

自立してから、いくらでもやればいいさ。そうすれば誰にも文句は言われない、後ろめたく思う事も無い。

「・・・一人なのか。」

しかし、芳彰は妙な事を呟いた。

「はい？」

「いいや、別に。帰ったら片付けないとな。美晴も手伝うか？」

結局説明は無く、何を言いたかったのか私には想像が付かない。何というか、誤魔化されてしまったような気がするのはいせいだろ  
うか？

「遠慮しとく。・・・自分で決着つけて下さい。」

「厳しいな。」

「うん。」

顔を引きつらせた彼に澄まして返した。

別に誤魔化されたからって訳じゃなく、この我が俣の後始末は、芳彰が自分でやるのが筋だと思う。おまけに、私が行ったら絶対片付けにならないのは目に見えている。

・・・それに、私が辛いじゃないか。

彼の考えている事（後書き）

えーと、酒飲めないって所を軽く見られても、

これは体質なんだからどうにもならないんだぞー！

飲み会参加しても、「何だ飲めないのか」って顔されるのも結構キツイし、

だからと行って行かないのは、付き合いが悪いな事になるし、

・・・といった不満。

酒飲んで騒いでるのって、結構羨ましいんですよ？

しっとりお酒飲んでるシーンなんて、憧れるんですよ？

以上、下戸の主張でした。

## ピロートーク？

「ねえ、絵はいくらで売れたの？」

気だるい体をベッドに転がして、ようやく今になって気になっていた事を聞いてみた。

今日一日、金銭感覚の違いに困惑しっぱなしで、変に気疲れした。芳彰が体の向きを変え、マットが揺れる。

「さあ？　まとめて持ってかれたのが、20万になってた。一枚いくらだろうな？」

「に、20万??？」

仰向けの芳彰は事も無げに言うが、私は相当に驚いた。

「そ、けど何か怖くて聞けなかった。」

「・・・そつか。」

「自分の描いた物に、一体いくら値が付けられたのかって知りたけれど、それを知るのも何かさ・・・。」

そう言うと再び向きを変え、私を引き寄せて抱き込んだ。これは芳彰が不安を感じてる時の行動で・・・どうやら私の出番みたいだな。

「私は芳彰の絵好きだよ。最初に見せられたやつは、腹が立った覚えしかないけど、キレイだったと思う。」

私は随分と前の話をした。

まだ本名も知らなくて、初めて芳彰の部屋に連れて行かれた時の事。私がモデルだと言って見せられた、感覚的な絵。荒野に建つ城の楼閣に咲く黄色い花。

同時に、『お前、そんな感じだろ？』って、私の事を見透かしたような事をつらつら言われ、弱い部分なんか気付かれたくもなかったのにつて、泣くほど悔しい思いをした。

・・・自分でも認めたくない部分を、あんなにもはっきりと指摘されたから。

「そうなのか？　初めて聞いたな、それ。」

「当たり前だ。初めて言ったんだから。」

わざわざ弱みを見せるような真似が、できる訳が無いだろう？

「お前、何の絵になるのは気にしてるくせに、出来上がった物には興味無さそうだからさ・・・そんな事言われるとは思わなかった。」  
薄暗くて顔は見えないけど、その声は心底意外そう、私としても心外だった。

「そう言われても好きなんだ。世界観とか、意外性とか、描いてる時間とか、その後姿とか・・・。」

何かつい言ってしまったが、言つてて段々恥ずかしくなってきたものの、たぶんもう遅い。

「それだけ？」

やっぱり、見事にそれを察知した芳彰が攻勢に打って出てきた。・・・余計な事を。

「・・・何を言わせたい？」

「俺は？」

「・・・嫌いなら、こんなとこにいない。」

そんな今更な事、聞かないで欲しい。恥ずかしいじゃないか！

「そこは『好き』っていつてくれないんだ？」

「言わせようとしてるから言わない。」

そんな手には、絶対乗りたくない。

「・・・本当に、天邪鬼だな。」

「習性だ。」

そうだよ、私は捻くれ者ですよ。

「なら・・・。」

そこで一度言葉を切った芳彰は起き上がり、更に余計な事を言い出した。

「言わせてやる。」

「はあ？ ちよ、ちよつと、今何時だと？ やっ、こら、あ、んーっ！ー！」

意図に気付いた私は、逃げようとしたが、あっさり捕まって組み敷

かれてしまった。

まあ、どちらにしてもこんなホテルの部屋の中で、逃げ場は無いのが当然で・・・分が悪いとかそんなレベルの話でもない。

「ちょ、まてっ、そういうのは違うだろ!？」

「さて、知らないな。美晴が素直じゃないからだ。」

・・・そして、たぶん私は何度も好きと言わされた・・・のだと思う。

はつきりは覚えてない。

・・・それにしても、卑怯だ!!

朝は芳彰に起こされた。

ちよっかい出されて目が覚めたが正しい。

たぶん早い時間だったのだろうけど、芳彰のせいで結局朝食の時間ギリギリに、慌てて服着て1階のバイキングレストランに行く破目になった。

それにしても、芳彰を見てると何か色々新鮮だった。

朝の身支度なんて当たり前の事で、特に男の人がヒゲ剃るって、当たり前前の事なんだろうけど、私には珍しかった。

何年ぶりだろう？ 父さんが死んじゃってからだから・・・5年ぶり？

じーっとその様子を眺めてたら、何か嫌がられた。

そして、問題なのは私の準備・・・。

このしつかり取り揃えられた化粧品は、使わなくてはいけないのだろうか？

容器のロゴは、きっと誰でも知ってるブランドだけど、でも化粧の仕方を誰でも知ってるなんて思うなよ？

あるだけの化粧品をベッドの上に転がして、好奇心と羞恥心の狭間

で揺れていたら後ろで笑う声がした。

「はいはい、見よう見まねでよければ手助けするぞ?」

自分の支度が終わった芳彰は、腹が立つほど余裕の態度だ。

しかし同時にこの瞬間、私の中の天秤は一気に好奇心の側に傾いた。

「化粧水付けて、下地塗って、ファンデーションまでは、やってみようか?」

そう言っつて、芳彰はボトルとチューブの容器を順番に並べる。

「どこまで分かる?」と聞かれた私が、「さっぱり。」と答えたからだ。

「親がやってるの見てれば、何となく分かんないか?」

「興味が無かった。」

「・・・そうか。」

なら仕方が無いなという溜息を吐かれて面白いはずも無い。だがしかし、それはとりあえず置いておいて、指示に従い順番に塗ってみたが、途中で出し過ぎないとか、ちゃんと伸ばせとか、細かい言葉が飛んできた。

それから先は、芳彰がやってくれた。

スポンジでもう一回ファンデーションはたかれて、アイラインやアイシャドウ。を施された。

「こういうのは絵を描くのと同じ感覚だつて。何となく、キレイな感じになればいいんだから。」

・・・そうかもしれないが、何となく失礼な表現じゃないかそれ?

人の顔をキャンバスみたいに言うな。

それにしても、手馴れた感じで違和感を覚える。

「他の人にもしてるのか?」

「何で? 初めてだつて、妙な事を勘繰るな。」

手を動かしたまま、軽くないなされた。

だとしたら本当に器用なものだ。本当に絵を描いてる気でやってるのかも知れない・・・でも、やっぱりそれはそれで複雑だぞ?

## ピロートーク？（後書き）

まー、お泊り旅行なんてこんなものですよ（笑）

化粧がお絵描きってのは、私が常日頃思っている事だったりします。

とは言え本人5分くらいで終わりますが。

アイシャドウなんかは塗り絵だなんて、

化粧の頻度も低いんですけど（^^）；

絵を描く理由（前書き）

9 話目です。

ではいよいよ。

## 絵を描く理由

昨日フロントで渡されたカバンは、送り状と一緒に再びフロントに引き渡された。持って歩くと邪魔なので、家に送ってしまうらしい。ホテルをチェックアウトした後、駅まで歩いて電車に乗って、駅を2つ分戻って美術館に連れて行かれた。

「ここは俺が来たかったんだ。」  
入り口近くに掲示された大きなポスターの前で、芳彰は嬉しそうな顔を見せた。

「・・・印象派の光と影。」  
ミレー、モネ、ルノアール誰でも知ってるような名前の文字が並んでいて、何となく圧倒される。

「そつちもいいけど、こつち。」  
しかし、そう言って指差したのは、ミレーの睡蓮の絵より遙かに下に書かれた小さな文字だった。

「地元画家の『心』第二展示室。」  
「そ、俺が絵を描いてる理由。切っ掛けてヤツを見せたかったんだ。」

私は驚いて、思わず隣を見上げた。  
「・・・どうした、今日も昨日に引き続き、自分の事を喋りたい日なのか？」

メイン会場の企画展示室を見事に無視して、第二展示室に直行した。休日の第一展示室には人が大勢並んでいたが、こちらは別世界のようにながいない。

おかげで芳彰は「本当に見に来たのか？」って言いたくなるほど、  
どンドン先へ先へと歩いて行く。

展示してある数々の絵に目を向けるものの、その実は見るでもなく次々と通り過ぎて行く。やがて目的の絵を見つけたらしく、やっと

一枚の絵の前で足を止めた。

芳彰が懐かしそうな目を向けているのは、板に描かれた勇壮な武者の絵で、白馬と赤い鎧がとても目を引く物だった。

「これ、三嶋神社に奉納されてる絵なんだけどさ、小さい頃怖かったんだ。迫力あるだろ？」

うん、確かに馬も目を剥いてるし、武者も髭が上を向き、目も大きくてなかなかの迫力だ。

「顔が？」

「・・・全体的に。絵なのにつてさ、それから少し大きくなって、逆に凄いつて思うようになった。」

「・・・で、自分もそんな絵が描けたらな、っていうお決まりコース？」

「お決まりつて言うな。・・・事実だけど。」

あ、芳彰が拗ねた。

日本の風景じゃない水墨画と、花の日本画と・・・何となく見覚えのあるタッチかもしれない。それから次の絵に目を移すと、本当に見覚えがあつて驚いた。

「あつ、これ知ってる。」

松の木に止まる雄々しい鷹は、小学校の校長室に飾られていた。

「そつか、この辺の学校には寄贈されてるからな。」

プレートを見て納得している芳彰を見て、何となく私も納得した。

「芳彰の小学校にあつたのはどれ？」

川を挟んで学区が違う。

芳彰は一度私を見て、改めて飾られた絵に目をやり、2つ隣の桜の絵を指した。

「これ。」

花は白に近いピンク色で、空も枝も全体的に儂げな淡い色合いの中、金の雲だけが力強さを感じさせる。プロの絵に対して失礼かもしれ

ないが、バランスの良い絵だと思った。

「ふーん。」

「・・・それだけか？」

「うん。」

感じた事は言葉にしにくい。

桜が満開の時期に誕生日を迎える私にとって、何となくだけこの花は特別で、今年からは更に重要な物になった。

「でも、これ好きだな。」

きれいな桜は大歓迎だ。

「・・・そうか。」

不可解な物を見るような目を向けられたから笑顔を返してみると、肩を竦められた。

先を見て行くと、解説の文章と共に公園にある石碑の写真が掲示されていた。

「ねえ、これ何考えながら眺めてたの？」

「は？」

写真の前で言ったのに伝わらなかった。残念。

「まだ史稀しきつて名前も知らない頃に、公園でこの石碑を眺めてる所見かけたんだ。何してるんだろう？ 何見てるんだろう？ って気になってたんだ。ねえ、あれ何考えてたの？」

ちらりと見ると、芳彰は何故かあからさまに目を逸らした。

「・・・痛い所を突いてくるな。俺があそこにいる時は、行き詰ってる時だ。」

なるほど。

「思うように描けなくて苛いら付いてる時にあそこに行って、初心に戻るんだ。」

なるほど、なるほど。

「じゃあ、あそこに行けば遭遇率が高かったのかな？」

あの当時、私はヒントも無しに史稀をかなり探して回った。こんな

ポイントがあるのならあの時には是非知っておきたかった。

「・・・何かひどい事言つてないか？」

「何が？ あー、でもそれだと機嫌の悪い史稀にしか会えなかつた  
って事になるのか・・・って、でも大して変わらないかな？」

どっちにしろ、話しかけると機嫌は悪かつた。

ニツと笑つて見上げると、半眼で見下ろされた。

「・・・悪かつたな、無愛想で。」

「いえいえ、良い思い出ですよ？」

「・・・やっぱり、美晴の考えてる事はよく解らん。」

「それこそ思う壺だね。」

そう言つてニヤリとすると、頭をぐしゃぐしゃにされた。

## 絵を描く理由（後書き）

モデルの画家はいます。

絵は適当に設定したり、改変してますが。

## 種明かしでぐったり

人の多い展示室も一応見て回り、ファミレスでお昼ごはんを食べて帰った。

高いお店は、やっぱり何だか落ち着かなくて、もう当分遠慮する。家に帰ると、何故だか芳彰も一緒に上がり込んで、母親と妹とすっかり仲良し状態でお茶をしている。

・・・何だ、私だけ理解出来てない、この一人蚊帳の外みたいな状態は？

「ねえ・・・昨日もそうだったけど、何でそんなに仲がいいの？」当然の疑問を口にする、その場にいる全員が私の方を向いた。

ねえ、だから何でそんなに嬉しそうなの???

「知りたい？」

意味ありげな言い方をする母さんに、「いい、聞かない。」と言いたくなるのをグツと我慢して、

「・・・知りたい。」

と、負けを認めた。

「ふーん、今日は素直ね？」

にんまりとする母さんに反抗心が湧いたが、我慢だ美晴！ と、必死に耐えた。

「・・・さすがに状況が見えないもん。」

「あら、簡単な話よ？ 美晴のいない所でコツソリ会ってただけなもの。」

母さんは事もなげに言ってくれるが、私には十分衝撃的な内容だ。ねえ、本当にコツソリって何？

「いつまで経っても美晴が紹介してくれないから、直接連絡取っただけよ？ 携帯の番号は和歌奈が知ってたからね、ねー。」

「ねー。」

ねーじゃない！

「・・・和歌奈は何で、芳彰の番号知ってるの？」

「・・・面識があるのは事実だけど、それくらいで番号の交換までするか？」

「えー、前に追いかけて、芳彰さんを家に連れ込んだからだよ。」

「何それ!？」

「寝ちゃった私を送ってくれた時じゃないよねそれ!？」

「だって、おねえちゃん秘密主義者なんだもん。」

「してやったりの顔をしているが、納得できる訳は無い。」

「・・・どうして私の周りの人間は、こんなのばかりなんだろう？」

「俺も二人のやる事に驚かされたけど、本当にお前の家族だなあつて思ったよ。」

「芳彰も達観したような事を言うな。」

「何か一気に疲れた・・・脱力感でクラクラする。」

「・・・ごめん、私逃げていい?」

「あーら、駄目に決まってるじゃない。まだデートの感想聞いてないもの。」

「当然だと言わんばかりの母さんの台詞に、私は泣きたくなくなった。」

「・・・私は、母さんに勝てる日が来るんだろうか？」

月曜の朝になっても、私のショックは癒えなかった。

おかげで学校に着いてからも、苛々していた・・・もちろん悔しくてだ。

教室でぼんやりと、何か報復はできないかと頭を巡らせていたら不意に葵の声がした。

「美晴、これプレゼント。」

細かな模様の入ったピンクにの紙に、茶色い線でシンプルな花の描かれた封筒を机の上に置かれた。

「何これ?」

「んー? いいから。見たらわかるわよ。」

そう言つて見事な笑顔を向けてくれるから、物凄く嫌な予感がした。  
・・・既視感。

少し前に同じ様なやり取りがあつた・・・ただし立場は逆で。  
おまけに、葵がこんなに良い笑顔を意図的に作る時には碌な事が無い。

嫌な気分分で封筒を開けると、予想通り中身は写真だ。

以前、私が葵と聡太くんによつた事を、見事にやり返してくれたつて事か・・・さあ、私は何を撮られた？

覚悟を決めて写真を取り出すと、一昨日の姿でげんなりした。

芳彰と手を繋いで歩いている所、ジュエリーショップの前で抱きついた時、

水族館で笑いあつてる姿に、ホテルに向かつて歩く後ろ姿。

・・・もういいです。

もう私はこの件でやり返そうなんて思いません。・・・たぶん。

溜息を吐いて机に突つ伏すと、

「ホテルに泊まって、何してたかは聞かないでおいてあ・げ・る。」  
と、葵は楽しそうに私の耳元で囁いてくれた。

・・・本当に、どうして私の周りには、こんなのはっぴかりなんだろう？

## 種明かしでぐったり（後書き）

読んで頂きありがとうございます。  
本編終了、でもあと2話あります。

類は友を呼ぶって事で。

牡羊座のB型女の内面を描いてみました。

考えてる事全部は喋らないので、周りは「？」なんですよきつと！

（自己正当化）

自分から見た外の世界、勝ち負けにはこだわらる。そんな感じで

えーと、読んでもらって判るとおり、どうも葵はおまけです（汗）  
美晴、芳彰、聡太にはがつり入れるのですが、葵にはどうにも入れない。

もう少しキャラに愛着を持とう。

時系列的にこの次が「炭酸水」で、もちろん暗躍してた美晴の話を  
書く気満々です。

他の話3本上げた後ですが・・・。

夏休みの航の話も書きたいと思っっているのですが、大丈夫か私？

とりあえず、残り2話分の推敲します。

（2011・07・21）

## 沈思から行動へ（前書き）

外伝の1話目です。

ネタ晴らし1。芳彰の内面の話になります。  
ではどうぞ。

## 沈思から行動へ

夜に突然、「今から行くわね。」って用件だけの短いメールが届き、本当に10分もしないうちにそのメールの送り主たる姉がやって来た。

「はい、これあげる。」

と、その姉は、急に茶色い封筒を投げて寄越した。俺がいない方向に。

その軌道は油絵の具の乗ったパレット一直線で、中身が何か知らないけど危ないっての。封筒も絵の具まみれになるし、パレットが床に落ちたら大惨事だぞ？

慌てて動いて捕まえると、

「ナイスキヤツチ。」

って、能天気な声を上げてくれた。

「……せめて俺のいる方向に投げてくれよ。」

「あら、芳彰の方に飛ばなかつただけよ。」

いや、明らかに方向がおかしい。逸れたとかいうレベルでは無かつた。

疑わしいながらも、追求した所で碌な事にはならないので、諦めて封筒の口を開けて覗き込むと、その中にはお金が入っていた。

「姉ちゃん……何これ？」

「何って、あなたの絵の売り上げ金。画廊の取り分は引かれてるけど……たぶんこれ、あなたが初めて自分で稼いだお金よ。」

その言葉に驚いて改めて封筒の中身を見直すと、ざっと20万くらい入っている。

以前描いたキャンバスが、ごっそり10枚くらいは無くなってたが……そうか、こんなもんか。

それが素直な感想だった。

「気に入ってくれたお得意さんもいるから、また持っておいでって

言われてるんだけど・・・良い？」

既に物色を始めている姉に、形だけの了解を求められ、

「どうぞ自由に。」

と、溜息混じりに言葉を返した。いや、そうするしかなかった。

「今からコーヒー入れるけど、飲むだろ？」

「うん、ありがと。」

俺は一枚一枚、自分のイメージを精一杯形にしてきた。

だから、描いたものにはかなりの愛着を持っている。ドライに金のために描いたものならいざ知らず、だがそんなものは未だ描いた事がない。

だから、手許から無くなって行くのは相当に複雑な気分で・・・その選別作業を平然と見守るほど、気丈でいられる自信は無い。

でも、後生大事にしまっておく程の価値がある訳でも無いと、たった今知らされたばかりでもある。

・・・だから逃げた。

買ってくれた人がいるという事実は喜ばしい。

・・・そう自分に言い聞かせながらコーヒーマーカーに水をセットしていると、不意に姉は声だけを投げて寄越した。

「ところで芳彰？」

「何？」

「いつ帰ってくるの？」

姉は、もう一つの問題に何の遠慮も無く触れてくれる。

腫れ物に触るように窺われるのも心苦しいが、こんなにはっきり言われても返答に窮する。

「・・・近いうちに。」

俺は情けない気分で、曖昧に返した。そろそろ限度だろうという事は感じている。

ここに来た時とは違う理由で、今は居心地が良くて毎日が結構楽しい。

しかし今の環境が、俺がズルをした結果手に入れた・・・偽りのものであるという事実は拭えない。

それ故に俺は、堂々と胸を張って過ごせていない。ずっと心のどこかに息苦しさを感じ・・・きつとあいつも、そんな俺を観察している。

情けないと思われているのだろうが、一向に口にはしない。その事が逆にきつい。

「そう、じゃあ決めたら早く教えてよ？」

姉はあっさりそう言い、再び絵を物色する事に没頭し、その日はもうその件に触れてくる事はなかった。

さて、これはどうしたものだろう？

姉がキャンバスを抱えて帰った後、俺は封筒を前にして頭を悩ませる事になった。

手放して喜べる心境でない以上、この金は俺にとって負担でしかない。特に買いたい物があるわけでなく、貯金というのも何となく違う。

これは思いもかけない泡銭であり、ぱーっと無くなってしまった方が後腐れが無い・・・とは思っただが。さて、どう使ったものだろう？

自分に使うのでなければ、人にとりう事になるが・・・。

と、そこまで考えて、使い道は一つしかないじゃないかと、俺は一人で笑った。

8月末まで休学と届けは出しているが、やっとその気になれたのだから、教授陣や友人達に挨拶するために久しぶりに大学に行った。ひよっとしたらこの行動は、自分が逃げ出さないための楔なのかもしれない。

「9月からまたよろしく願います。」と、口にする事で自身に言い聞かせ、決めた事を身に刻み込もうとしているのかもしれない。

何となくそう思った・・・その帰り道、すぐ傍でクラクションが鳴って驚いた。

思わず音の方向を確認すると、つい今しがた視界の隅で路肩に停車した、黒いキューブの助手席の窓が下がり、運転席の方から聞き覚えのある声が誘いをかけてきた。

「芳彰くん、今帰り？ 良かったら送るわよ？ 乗っていく？ もう是非どうぞ。」

「弘美さん・・・びっくりしたじゃないですか。っていうか、そんなに俺を乗せたいんですか？」

身を屈めて窓の奥を覗き込むと、美晴の母親は屈託のない笑みを見せ、何の躊躇もなく何度も頷く。

「そうよ、乗せたいのよ？」  
「・・・それは、拒否権なんか無いんじゃないかと思うのは俺だけですか？」

という訳で、彼女の母親が運転する車の助手席に座る事になった俺は、何を言われるのか内心ハラハラしながら言葉を待った。

「芳彰くん、大学復学したの？」

「いえ、まだです。9月からなんですけど、少し挨拶周りってやつです。」

「へえー、どうだった？ 久しぶりの大学は？」

「・・・どうと言われても、開いた時間は大きいのかも知れないですけど、やっぱり大学は大学ですよ。」

「そう。」

こんな曖昧な答えに対して、弘美さんは納得したように頷いた。俺は今どのくらい探られているんだろう？

美晴の親だと思っただけで、妙に勘繰ってしまう。

「弘美さんは仕事ですか？」

「うん、とりあえず1つ終わって、次の荷物を取りに帰ろうと思っ  
てね。そしたら芳彰くん見つけちゃったのよ。」

「はあ、」

俺は見つけられたのか。

「ところで、美晴があなたの部屋に入り浸ってるのは知ってるんだ  
けど、デートとかってしないの？」

いきなり本題に入った。何れかを非難している訳でなく、やはりこ  
の人は興味本位で聞いてきているようにしか思えない。

「・・・無いですね。いつも美晴が来て・・・向こうからそんな事  
を言い出した事も無いですね。だからかな、何となく過ごして・・・  
」

「何となくねー。」

親の前では、そうとしか言える訳が無い。だから、解っていてそう  
いう目で見るのはやめて欲しい。

「だからかしらね？ あの子の服ぜんぜん可愛げが無いのよ。」

「はい？」

また唐突に話の方向が変わり、俺は瞬時にはついて行けなかった。

「あの子、着飾ろうとかって気が無いのかしらね？ 小さい頃、可  
愛い服ばかり着せてた反動かしら？ 自分で選ぶようになったら  
まったくそういうのを着てくれなくなったのよねえ。」

どうやら日頃の美晴の服に不満があるらしい。

確かに可愛らしいと表現できる服を見た事は無いが、あの性格を思  
えばそんなものだろうと俺は思っている。

おそらくあの個性的なデザインのTシャツの数々は、かなりの拘り  
を持って選んだものだろう。なかなか面白いものばかりで、俺とし  
ては嫌いではないのだが、母親からすれば不満らしい。

しかし、その愚痴のおかげで俺は、美晴への恩返しの良い手段を思  
い付く事ができた。

「じゃあ、それも含めてやってみましようか。」

「何々？ 芳彰くん何の話？」

「美晴を着せ替えさせて、デートに連れ出してみましよう。」

「何、どういう事？ それ面白そうな話よね？」

運転しながらも、目を輝かせている弘美さんに、実は・・・と、絵のお金と近々家に帰る旨を話した。すると弘美さんは興味深そうに耳を傾けた後、驚くべき事を口にした。

「じゃあ、美晴をお泊り有りで貸してあげる。」

「は？」

やっぱりこの家族は常識では測れない。

「時間はあるようで無いのよ？ 思い出は多い方が良いでしょう？」  
とりあえず、納得できるだけの理由があってホッとはしたが。こんな考えを持つ人間を親に持つと日常が大変だろうと、少し美晴に同情してしまふ。

いや、余計なお世話というものだろうか？・・・この親がいて、あの彼女が完成したのだ。

「ああ、でもまだ私、おばあちゃんにはなりたくないからね？」

また改めて念を押され、俺は苦笑するしかなかった。

## 沈思から行動へ（後書き）

絵の値段って、本当に分からないんですよね。

ネットで探してみると、

「いくらにしますか？」と聞くと、皆さん困ってらっしゃいます。  
的なお話を見つけました。

・・・そうでしょうね。

私だって、自分の描いた絵に、自分で値段をつけると言われても  
相当困ります。

いくらで買ってくださいますか？ って言う方が気が楽です。

所詮私は投げ出した人で、趣味レベルなんですけどね（^^；

**母親の意地と姉の気持ち（前書き）**

はい、これでラストです。  
ではさようなら。

## 母親の意地と姉の気持ち

友人の娘さんが所属する劇団のお芝居を、他の友人二人と一緒に見に行ったら、それが予想以上に面白くって、帰りにお茶をしながら偉そうに批評し合った。

本当に充実した楽しい時間を過ごした後・・・私はそれを見付けてしまった。

何度かお世話になった事のある、昔からある一軒の画廊のガラスの向こうに、見間違えようの無いタッチの絵が見えた。

「あら、宮原さんどうしたの？」

思わず足を止めていたらしく、中原さんに見咎められて自分でも驚いてしまった。

「画廊？ 何か良い絵でもあるのかしら？」

絵が好きな大平さんは、ガラスの向こうに興味を湧かせて楽しそうな目を向けている。

「あつ、ええ・・・見てみたい絵を見付けたの。少し見てもいいかしら？」

まさかこんな所で、息子の絵を見つけるなんて思いもしなかったわ。そして、私達は三人揃って店の扉を潜った。

「いらっしやいませ、ご婦人方。」

以前より些か老けた印象の店主は、私達を人の良さそうな笑顔で迎えてくれた。

それから私を見て、改めて個別の挨拶をしてくれた。

「ああ、宮原さんじゃないですか。お久しぶりです。」

「こんにちわ、お久しぶりです。」

そう、返事をするよ、

「いえいえ、こないだはお嬢さんが、たくさん絵を持っていらっしやいましたよ。」

店主は嬉しそうに、私の知らない話した。

「茜が絵を？」

「あの……、その絵……、」

私には状況が解らないので、気になっっている外から見えた一枚の絵を指して、尋ねてみると、何となくそのカラクリが見えてきた。

「ええ、あれもお嬢さんから預かってる一枚ですよ。なかなか面白い作品ばかりでね、なのに、誰が描いたのか尋ねても教えてくれなかつたんですよ。」

店主は残念そうにこぼして、頭を掻いている。

なるほど、茜が噛んでるなら納得ね。

もうっ、あの子ども私に内緒で色々やって……本当に姉弟仲がいいんだからっ！

行き難い私に代わってなのか何なのか、茜は時々末の息子の様子を見に行っている。

勇気を出して、一度息子の部屋に行ったのだけれど、その時に思いもかけない言葉を聞いて、私の足はまた遠退いてしまった。

「ねえご主人？ 彼の描いた絵を他にも見せて下さる？」

「……彼、ですか？ 奥さんも描いた人をご存知なんですか？」

店主は困ったように笑い、教えて下さいよとせがまれたが、

「ナイシヨ。」

と、煙に巻いておいた。

息子の絵を母親が買うなんて、何となく恥ずかしいもの。

それにしても……茜が何かするつもりなら、私だって。

主人も裕隆も何か芳彰の事知ってるくせに、みんな私には内緒にしてばかりで、正直面白くなかつたのよ。

……見てなさい。あまり母親を舐めないでよね？

そして私は、並べられた息子の絵の中から一枚の絵を選んで買った。中原さんと大平さんも、楽しそうに一枚ずつ買ってくれたが、正直な所複雑な気分で見えていた。

ずっと私がこの絵の、一番のファンだという自負がある。認められるのが嬉しい反面、知らぬ所に離れて行くのは、やはり寂しいような心地がした。

\* - \* - - \* - - \* - - \* - - \*

離婚の調停がグズグズのまま纏まらなくて、やっぱり男女の仲は難しいなって、疲労感いっぱい思いで家に帰ってくると、リビングに飾られている絵が変わっていた。

母の気分や季節によって、時々入れ換えられてはいるもの・・・まさかこの絵がここにあるとは思わなかった。

「あら、お帰りなさい。今日も遅かったのね？」

「ああ、うん・・・、仕事が長引いちゃって・・・ねえ、それよりこの絵・・・どしたの？」

母はにんまり笑うと、

「いいでしょう？ 画廊で買ったの。これが3万円ってお買い得だと思わない？」

と、明らかに惚けている。

何だ・・・ちゃんと分かって買ってきたのね。何て回りくどい事してんのこの人？

「・・・何も買わなかったって・・・今までいっぱい家にあっただのに。」

まさか、母さんが芳彰の絵を見付けて、買って来るなんて思いもしなかった。

「あら、これでもちゃんと評価して、応援してたつもりだったのよ？ だから、今日だって一番気に入ったのを買ってきたのに。」

「母さんの心配とか応援は、分かりにくくて敵し過ぎるから。あんまり芳彰には届いてないと思うよ？」

私だって、それに気付くのに随分とかかった。この人は、下になる毎にできて当たり前前所がある。

兄の出来が良過ぎたせい、多少の事では褒めてくれない。嬉しかった事を話すたびに、「そう。」と何でもないような返事をされた。

小さかった私は、それはそれは努力したつもりだ。あの言葉の先に『もつと頑張れ』と暗喩されているような気がして、絶対褒められてやると躍起になった。

でも私は途中で疲れてしまった。

しかし、そうして少し離れた所から見られるようになると、なんとなく母の内側が理解できるようになった。

この人は、素直に喜ぶ事が恥ずかしいらしい。できればもつと頑張つて欲しいという思いも混じっているようだが、私達が感じていた程ではない。

そうして、母のおかげで努力家になった芳彰は、本当に色々成し遂げてくれた。成績も良くて、運動もできて、絵では何度賞状をもらって来た事か・・・でも、あまり大つぴらに褒められていたような記憶は無い・・・表面上は。

だけど、一番下が一番可愛がられている事は、私には何となく分かっていた。多分兄も知っている。

「母さん、もう少しちゃんと誉めてやるだけで良かったのに。」

弟の分と、私の分と、少しだけ非難を込めて、今更ながらに伝えてみた。

「そうかしら？ 私そんなに厳しかった？」

嘘・・・自覚、無かったんだ・・・。

母を少し恨めしく思うが、その反面感謝が無い訳では無い。

・・・でも芳彰はこれからだ。

「芳彰が帰ってきたら、少しは反省してよね。」

芳彰は一度、ちゃんと向き合わなくてはいけないんだから。

今のままの状態は、きつとあの子が許さない。だから芳彰もきちんとここに帰ってきて、けじめをつけるはずだ。

そうでなければ彼女の傍にはいられないって、芳彰自身が思うはず

だもの・・・必死になるわよね、そりゃ。

・・・本当に面白い子を見つけたものよね。

でもこれは、母さんには刺激が強いかもしれないから、やっぱり黙ってしましょ。

父さんも傍観の構えだし、どうなるかが楽しみなのが本音だもの。

本当、この絵みたいに雪が解けて、可愛らしい花が覗くといいんだけどね。

雪が溶け、春を迎える野の原に覗く小さく可愛い黄色い花。

改めて弟の描いた絵を眺め、楽しそうに絵を描いていた頃を思い出して、何となく懐かしい気分になった。

\* - \* - - \* - - \* - - \* - - \*

7月になった日に、ようやく家出息子が帰ってきた。

おずおずとリビングに入ってきた途端に、絵に気づいて驚いている様子に、やったわって気分になり、頬が緩むのを隠せない。

「やーっと、帰ってきたわね。」

「・・・ああ、うん。・・・ごめん。でもこれ？」

「いいでしょう？ 画廊で見かけて買ってきたの。」

混乱気味の息子に、もう少し驚かしてやるうって気分になる・・・心配かけられた分、人が悪くなってるわね、私。

「・・・そう、なんだ。」

あらあら、良い感じ？

「まさか息子の絵を見付けるなんて、思いもしなかったわ。」

「はっ!?!?・・・母さん、知ってたんだ？」

あー、もう可愛い！

芳彰ってば、いい反応するんだから。

「当たり前よ。あなたの絵が判らない訳無いじゃない。私を誰だと思ってるの？ 母親を舐めないでちょうだい。」

ピシヤリと言って、これで随分とすっきりした。

「参つたな・・・、親には適わないって本当なんだな。」

でも、半笑いで顔を半分覆う息子の手を見て、今度は私が驚かされた。

「・・・芳彰、その指にあるのは？」

指には銀色の指輪が光っている。男なのに・・・何て、言う気なんかありませんよ？ でもそれは・・・

「んあ、ああこれ？ 彼女とお揃いなんだ。」

指輪をかざして事も無げに言ってくれるけど、左手の薬指というのは、母さん意味深過ぎると思うわよ？

「まさかあなた、勝手に結婚してたりしないわよね？」

家出して、そのまま誰かと結婚してて・・・まさか、みんなこの事隠してたって言うんじゃないでしょうね？ ・・・ってもしそうなら、私はとても立ってられないわよ？

「・・・何言つてんだ、してないに決まってるだろ？ まだ俺は、そこまで責任取れる身分じゃないよ。ただのペアリングだ。」

「そう・・・。」

とりあえずはホツとした。これまでも、何人か彼女がいたのは知っていて、何度か話題に上がった事もあるけど・・・

でも、今の話しぶりから、これまでとは何となく雰囲気が違う気がした。

「そのうち紹介するよ。」

どうしたの！？ 今まではそんな言い出した事もなかったのに・・・、紹介してつてつくと、嫌がるから言つてたのに。逆に向こうから、しかも当たり前のように言われると、・・・私覚悟しなきゃいけないのかしら？

「・・・そう。」

「母さん、」

「はい！？・・・何、どうしたの？」

不意に呼ばれて、慌てて返事をした。

「ありがとう、それから・・・心配かけてごめん。」

感謝と謝罪の言葉を、照れながらも口にする姿を見て、私はジンと胸が熱くなった。

どうやら息子は出て行った時とは違ってみたいで、この家出で一回り成長してきたという所なのかしら？

だとしたら、この件は悪い事でも無かったのかもしれないわね。

・・・でもやっぱり私、彼女の存在っていつのがとつても気になるわ。

## 母親の意地と姉の気持ち（後書き）

えーと、経験と自戒を込めて（汗）

「もつと頑張れ」ってやっぱり思っちゃうんですよ、親としては。でも、薄い反応だと、子供は躍起になるんですよ。

認められて無いと思って、必死に頑張っていたのに、ある日フツとそうでは無かった事に気付き、あれ？  
って思うんです。

後は、やっぱり一番下は可愛がられるんですよって辺り？

読んで頂き、ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0470v/>

---

前に進むために。

2011年10月8日02時22分発行